卒業論文

演劇体験による自己と他者の解体と再生

2012 年度入学

九州大学　文学部　人文学科　人間科学コース

社会学・地域福祉社会学専門分野

2016 年 1 月　提出

要約

本論文では筆者の過去の経験から、演劇に触れることを通して人々の自己や他者に対する意識や関係性がどのように変化するのかに関心を抱き、人々の関心が遠のきつつある演劇が持つ社会学的な意義を追求することを目的としている。分析材料として、既存の演劇作品と演劇ワークショップを取り上げている。なお本論文では演劇を「鑑賞する」行為と「演じる」行為を演劇体験と呼んでいる。

分析の枠組として 2 つの要素に注目した。演劇体験において自己と他者を繋ぐ役割を果たしていると考えられる言葉と身体である。先行研究の整理及び分析ではまずこれまでのコミュニケーション論についてまとめた。私たちが日常生活の中でも演技を行っており、本音を隠してコミュニケーションを取ることを述べている。また現代の若者は限られた人間関係の中で生活しており、それゆえ社会の要請するコミュニケーション能力とのギャップに苦しんでいることを指摘している。また言葉と身体がそれぞれ演劇史の中でどのように扱われてきたのかを既存の演劇論や時代分析論から分析した。

そして既存の演劇作品と筆者が実際に参加した演劇ワークショップから自己と他者の関係性の変化を分析した。自己と他者の言葉の文脈のずれが円滑なコミュニケーションの困難を招いており、演劇体験においては、言葉は常に他者を必要とし、相互に理解しあうことが求められていることをまとめた。また既存の演劇作品を通して、自己の経験を舞台上の他者へ投影することによって、自分本来の在り方を模索する演劇体験の特徴を論じた。演技者も鑑賞者も自分の身体的な感覚を、演劇を通して再確認していることを述べた。演劇体験によって、隔絶されていた自己と他者の関係性は一度解体し、相互に作用しあうことによって、自己の内面や本質、他者とのコミュニケーションについて考える契機となっていることをまとめた。

以上の分析より、演劇の演技体験は、他者とのコミュニケーションを図る身体経験のインプットする機会となっており、その蓄積が日常生活の場における他者とのコミュニケーションや自己の捉えなおしにつながっていることを論じている。また鑑賞体験は、他者に対して自己を投影する行為を通して身体の記憶を他者にアウトプットし、自分の価値観や生き方の軸を考え直す経験となっていることをまとめた。自己と他者の関係性が常に揺り動かされる演劇体験を通して解体された自己と他者は、ひとつの「劇的なる共同体」として再生する。そして身体的な感覚を重要視している人々が自己のあり方や他者とのコミュニケーションを考える経験となっていることをまとめた。最後に今後の課題を記している。

目次

第1章 研究の背景・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

1.1 私と演劇―自己と他者の関係性―・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

1.1.1 中学時代の経験・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

1.1.2 誰かを演じるということ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

1.1.3 大学での経験・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

1.1.4 誰かが演じるということ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

1.2 演劇体験による人々の意識の変化―言葉と身体―・・・・・・・・・・・・・・・・・4

1.3 超越的な＜現実＞・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

1.4 演劇の社会学・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6

1.4.1 理解者なき日常・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6

1.4.2 伝統芸術が「つまらない」人々―大阪府の文楽の事例―・・・・・・・・・・・7

1.4.3 「公」と「民」と意識の分離―福岡演劇フェスティバルの事例―・・・・・・7

1.4.4 演劇の社会学・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8

第 2 章 先行研究の整理及び分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9

2.1 自己と他者のコミュニケーション・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9

2.1.1 演技における自由／不自由・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9

2.1.2 「繭」の中の幸福・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11

2.1.4 ネットで他者と出会う若者たち・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13

2.1.3 「繭」の中の不幸・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13

2.1.4 演劇ワークショップとコミュニケーション・・・・・・・・・・・・・・・・17

2.1.5 小活・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19

2.2 社会と演劇・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19

2.2.1 言葉と演劇・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20

2.2.2 身体と演劇・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23

2.2.3 現実と演劇・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・29

第 3 章　交錯する自己と他者―言葉と身体の役割―・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・37
3.1　分析手法・・37
3.2　自己と他者のコンテクスト―不自由な言葉―・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・38
3.2.1　知らない他者と出会うとき・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・38
3.2.2　平田オリザについて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・39
3.2.3　ワークショップの概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・40
3.2.4　言葉に対するイメージの違い・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・40
3.2.5　自己と他者のコンテクスト・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・41
3.2.6　言葉の役割変化・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・43
3.3　他者への自己投影―身体の記憶―・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・43
3.3.1　小林賢太郎について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・44
3.3.2　自己を考える 2 つの作品・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・46
3.3.3　他者への自己投影・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・47
3.3.4　身体の記憶・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・48
3.4　自己と他者が交錯するとき―客観化した自己―・・・・・・・・・・・・・・・・・・48
3.4.1　NPO 法人 A について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・49
3.4.2　ワークショップの概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・49
3.4.3　客観化した自己・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・50
3.5　小活と発展・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・52

第 4 章　劇的なる共同体の再生―演劇体験が生み出す＜現実＞―・・・・・・・・・・・・54
4.1　現代演劇のリアリティ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・54
4.2　＜現実＞を生み出す劇的なる共同体の再生―演劇体験の価値―・・・・・・・・・・56

第 5 章　演劇体験による自己と他者の解体と再生・・・・・・・・・・・・・・・・・・・58

おわりに・・61

[文献]